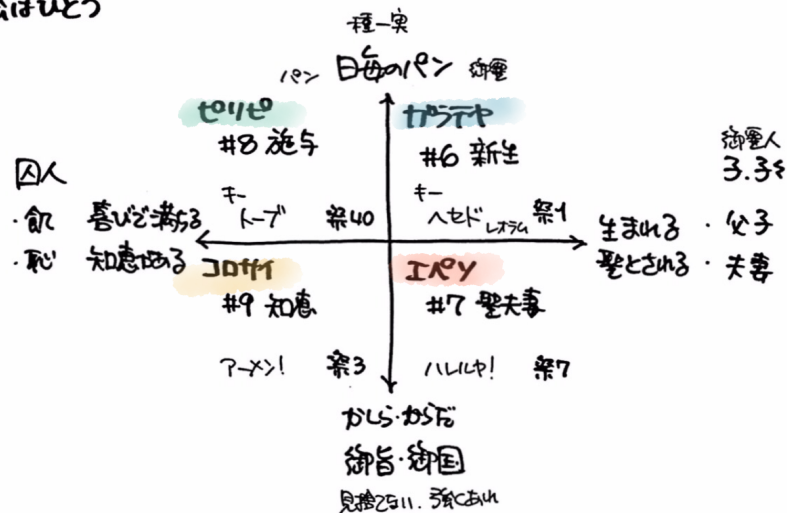




ガラテヤ、エペソ、ピリピ、コロサイ 主と教会はひとつ

ガラテヤ、エペソ、ピリピ、コロサイ
主と教会はひとつ

2016.3.11



cf. ユダヤ書 21:1-23:19
#6, #8, #7, #9

ガラテヤ、エペソ、ピリピ、コロサイ。この4つの関係を「新約聖書の手紙の構成」というところで、分析を一度しましたけれど、もう一度確かめるためにひとつひとつの手紙の分析をしてきました。結果としては、同じです。十戒の肯定的な表現として与えられている4つの手紙だということを言っていたのはそれで良いということです。

過越の祭りの前に、世にいるご自分のものを愛されたイエスは弟子たちにその愛を残ることなく示されました。私たちがひとつであるように彼らもひとつであるようにというふうに父に祈るというのが、ヨハネの17章に書いてありますけれど、キリストと教会はひとつである、キリストと教会の愛が満ち足りるというのが、この4つの手紙で、特に教えられて励まされているところだということです。

ガラテヤは新しく生まれること。割礼ではない、御霊によって新しく生まれるということ。

エペソの手紙は、不品行の反対、聖い夫婦。キリストと教会、教会は聖なる妻となるということ。

ピリピの手紙は、この中に盗むなと直接書いてあるわけではないのですが、与えるということが強調されています。与える者は、喜びで満たされる。受けるよりも与える者が幸いだというピリピの手紙。

コロサイの手紙は、キリストを知る。その知恵によって、偽りと戦うということでした。偽りと真理で戦うというよりは、偽りと感謝で戦うというのがコロサイの手紙の教えのところでした。

ガラテヤとピリピ、十戒でいうと6番目(ガラテヤ)、7番目(エペソ)、8番目(ピリピ)、9番目(コロサイ)ということですが、それは、出エジプト記21章からの判例法のところの6番目、8番目、7番目、9番目という順番で、順番が十戒と入れ替わっていることと同じように、並行を見ることができるでしょう。

6番目(ガラテヤ)と8番目(ピリピ)。御霊が与えられることと(ガラテヤ)、お腹いっぱい(ピリピ)、貧しい中でパンが与えられる。パンよりも喜びでお腹いっぱいになるというのは、日毎のパンを与えてくれるという種と実の話が両方出てくるのです。

エペソとコロサイは双子のように似ているのだけれども、双子のように違っているということです。そして頭と体の話をして、こちら側(エペソ)は御心がなされる。こっち(エペソ)は罪と悪の話。こっち(コロサイ)は偽りと戦って一致を保つという、見放さない、見捨てないということが書かれていました。こちら(コロサイ)が見捨てない、見放さない。こちら(エペソ)が強くあれ、雄々しくあれという新しい時代に入っていくためにということ。

そして、御心と御国ということがこちら側(エペソ、コロサイ)で、日毎のパンというのがこちら側(ガラテヤ、ピリピ)。主の祈りの後半の最初のところと、前半の後ろのほうというふうに、ちょっとシンメトリーじゃなくてアシンメトリーになってずれていますけれど、テーマとしては日毎のパン(ガラテヤ、ピリピ)という話とこちら(エペソ、コロサイ)御心が行われるということです。

ガラテヤとエペソは、生まれることと聖とされること。ピリピとコロサイはどちらも囚人である。囚人である状態の中で、問題はお腹が空くということ。そして、喜びでお腹がいっぱいになる。恥をかかせられるような感じですが、主に信頼して主を知っているということによって、その囚人の中でも知恵があるということがあらわされます。

ガラテヤとエペソのほうは、御霊によって子とされて、子どもとされて妻とされて、父と子の関係と夫と妻の関係です。ピリピとコロサイのほうは、囚人であるのに、囚われているのに祝福されて知恵があるということです。

祭りのいつもの「1,3,40,7」ということで言うと、過越の祭り(ガラテヤ)、ペンテコステの祭り(コロサイ)、40年の荒野(ピリピ)があって、仮庵の祭り(エペソ)という順番で、1,3,40,7の順番ではないかなと思います。最初の完成と最後の完成。最初の救いと最後の救いということも言えます。コロサイはアーメン、エペソのほうはハレルヤというふうに前回の双子研究をした時に分けていました。では、ピリピとガラテヤはどうですかと考えると、ピリピのほうは、喜びで満たされて祝福が与えられている…トブですね。平和とか、トブとか、繁栄が与えられるということと(ピリピ)、その恵み、連れ出されて、赦されて、新しく生まれた恵はとこしえまで(ガラテヤ)、ということ。

それで、主に感謝せよ、主はまことにいつくしみ深い(ピリピ)、その恵みはとこしえまで(ガラテヤ)、ハレルヤ(エペソ)、アーメン(コロサイ)と歌うというように、主の祈りと十戒と私たちの感謝と賛美の歌で全体を見ることができるのではないかとということで、主と教会はひとつである。喜びをもって主に仕えよ。神様の家にこれに入っていくという手紙の構成になっていると思います。